

イントロダクション

一九七〇年二月十一日のセミナーで、ラカンが精神分析の臨床が設立する「享樂の場」について語っています。¹それはエコノミストが語る「市場」のようなもので、何かのエネルギーが働いている場所として想定されますが、より厳密に言えば電磁場とのアナロジーで考えられるものです。たとえば光が水面を透過して屈折する時、その屈折させる観測可能な「力」によって電磁気学における「場」の概念が定義されます。ちょうどそれと同じように、情動に一定の変化をもたらすがそれ自体直接には観測されない抽象的な場として「享樂の場」が構想されます。

精神分析をもちろん含めた「こころの臨床」において、わたしたちの意識を通じてまず第一に観測されるのは、情動の変化であるといえるでしょう。そこには何か変化を起こす力が作用しているはずで、例えば不安を感じながら分析家の部屋のドアを叩いた人が、語り終えたあと片時、ほっと安堵の息をつくように、それは臨床の経験を通じて誰にも気づかれることです。お望みなら精神医学で用いられる不

安症状評価尺度で、その力がもたらす変化を数値化することもできます。

語りによる情動の変化はどのようにして起こるのでしょうか？ 神経認知科学的な思考のスタイルに馴染んだ方なら、情動処理に関わる神経ネットワーク、辺縁系と大脳皮質をつなぐループのコネクションの変化によって、と答えるかもしれません。言葉は、しかしニューロンに直接影響を及ぼすわけではありません。

言葉が影響すること、それはニューロンによって計算される事柄の全てに對してであり、情動に関わる情報の総体というべきかもしれません。おそらく一定のコードに沿って、身体生理学的な感覚を伴って、それは意識に出力されます。常に移ろいゆく、つかの間の事柄であり、絶えざる予測とその誤差のズレによってわたしたちの情動は形成されているのでしょうか。冷たい雨に降られてカフェに駆け込んで、すするカフェ・オ・レの熱さにアチチと叫び、思わず笑い出したくなるように。その一連の情動の変化プロセスは片時も完成したものとしては表象されず、常に移ろいゆきます。つまりそれは確率的な変化するものとしてしか、書くことはできません。あるいは、書き終えないことを止めないものです。

そのような変化する力の場を、ヒトが生きていることそのものの悦び——享樂 *jouissance*——の場と呼ぶことで、わたしたちの思索をつづけることにしましょう。享樂は言葉が影響を与える、ある実体であり、もちろん享樂する身体なしにはありえないのですが、生理学的な過程そのものには還元されないものです。しかし言葉の力がささやかでも治療の力を発揮するのは、言葉がそんな実体に対して効果 *effect* をおよぼし、意識される情動を動かす *affect* からです。ラカンはそのように、精神分析が関わる唯一の実体として享樂を考えました。それは目に見える情動＝変化を起こす力から想定される、ある抽象的な場

という概念に基づいてしか考えられないものなのです。シニフィアンを通じて解読され、到達される無意識の知が、言葉の厳密な意味での「フロイト的無意識」だったのですが、今やそれは、シニフィアンにおいて享樂する無意識として捉えなおされるでしょう。それは無意識の認識論的な地位について、実質的な革命をもたらすはずです……

残念ながらラカンは、この享樂の場について生前それ以上はつきりした考えを展開することはありませんでした。しかし彼のアイデアは、その死後四十数年を経て、今日驚くべき先見性を示しているように思われます。享樂の場に基づいてわたしたちの臨床を再起動させることは、現代のこちらの臨床が科学実証主義的であろうとして図らずも至りついてしまった荒涼とした原野で、確かな方向性となるのではないのでしょうか？

例えばこの三十年間の精神医学が、脳神経科学と遺伝学の進歩にほとんど最後の期待をかけながら、こころの病氣——たとえば「統合失調症」について、結局はひとつの疾患として見做しうるほどのまとまった知見を見出すにいたらず、治療に関しても、六十年前から本質的に変化の無い薬物療法をはじめ、さしたる進歩をもたらさなかったことをどう考えれば良いのでしょうか？

「精神疾患は、精神機能の基盤となる心理的、生物的、または社会的な機能の障害などが原因」となり生じる、などと我が国の高等学校でも教えられるようになりました。つまるところ、精神病について真正な意味で治療的に可能なことは、「こころ」と「身体」が言葉を通じて結びつくような場における「社会」的なケアでしかないのかもしれない。無論こころや言葉だけでは尽くされない、しかし神経学的なプロセスにも還元されない生の享樂は、そうした治療の場で語られるのであり、そこでこそ変容

しうるのです。

先に述べたように、享樂は確かに身体にかかわるものです。身体とは、もちろん肉と骨という基盤を持ちますが、なによりまず「私の身体」というひとつのまとまったイマジネール＝想像的なものであり、それは象徴的なプロセスを介して、この「私」に折り重なります。「あなた」と同じような「わたし」の身体、「わたし」は「あなた」のようになりたい……そのような言説の幻惑的な効果において、自我イメージは身体の周延へと延長され、享樂はそれらを満たします。お気に入りの「わたしの車」を駆る悦び。ドレスに身を包む「素敵なわたし」の満足。あるいはまた、「わたし」のイメージ固有の苦しみ、摂食障害や醜形恐怖における身体イメージの享樂……さらにヴァーチャルな身体イメージによってそれは補完され、その完璧なイメージがもたらす悦びと苦痛へと享樂は拡張されます。コスプレによって、着ぐるみをまとい、あるいはVRでアバターとなることで、ボヴァリー夫人をモデルにするのではなく、銀幕のモンローのメイクアップを真似るのでもなく、セーラームーンというキャラそのものに「なる」ことによって、今日の女たちは傷つき、病み、あるいは闘うのではないのでしょうか？ アニメは単なる絵空事／イマジネールではなく、すでに、わたしたちの時代に固有の、無意識を考えるうえで欠かせない言説において、享樂の短絡路を開いているのではないのでしょうか。精神病者にも当然あるはずの生の享樂は、例えば私の「作品」のアイデアが剽窃されるという被害妄想のかたちで、すでにそのような媒体を介して燃え広がっていたのではないのでしょうか。

フロイトが、エレンゼンを、ゲーテを、ドストエフスキーを読むべしと主張したように、偉大な作家は無意識の探求の先達なのでした。しかしそこで問題となるのは、もっぱら「ひとつの言語として」

comme un langage 構造化され、ゆえに解読される無意識です。言語を経て無意識へ至るあらゆる試みが尽きることはないのですが、その先で探求されるような——もはや私でない何かが享樂し、意味のないいまだ言葉ならざるコトバ／ラング *lalangue* として漏れ伝わるような——新しい無意識は、イメージそれ自体が常に動くものとして描かれ、情動を動かす場において、つまり「アニメ」において、その入り口を示すはずです。

ですから本書が目指すのは、作品についての精神的な「解読」を行うということではありません。むしろアニメ作品の方が無意識において作動するラングを捉える点で常に先行し、わたしたちはそれに追いつかなければならないのです。ラカンが精神分析の臨床を捉えるために構築した諸概念は、アニメにおいて、あたかも凡庸な解釈の御株を奪うように、すでに形を与えられ作動しています。

さてこの先アニメは、どこへ向かうのでしょうか。それはいずれ、AIによって再生産され続けるデジタルイメージの「自然」として、たぶん人類が死滅したあと描かれ続け、享樂の場として、誰も見る者がいないままで動き続けるのでしょうか。もしかするとそれは描かれることをやめない、現実界の完全な現出となるかもしれません。ラカンはかつて、そのように語りました——「症状は、現実界について書かれる事を止めぬ」^③。

果たしてそこからの出口はあるのでしょうか？ そのような、未来について語ること自体が否定されるような予測が実現されるまでの束の間、つまり、いずれはおよそ描かれることはヒトでないものが描くこととなり、その限りで何も新しいものは描かれまいという諦念のもとで、しかし描き終えないことをやめない、そのような反復される無意識の運動に寄り添って、わたしたちの思索の企みを展開

したいと考えます。アニメイトされたものにおいて、享樂の場においてラカンが見出した無意識を、いつもさらにもう一度、再起動させること——そこには「希望は残されている」ように感じられるからです、もちろん「どんな時にも」。